2020.6.1

（第３種郵便物認可）　福

県立すこやかシルバー病院（福井）　村田憲治・新院長に聞く

認知症 早期発見が重要

予防へ暗記意識を

県内の認知症高齢者は２０１９年４月１日現在で２万９千人余りで、今後も増加する見通しだ。県内唯一の認知症専門病院、県立すこやかシルバー病院（福井市）の新院長に就任した村田憲治氏（52）は「早期の発見、治療開始による進行予防が重要になる。家族が認知症の正しい知識を持つことも大事だ」と語る。（聞き手・野田勉）

「認知症の正しい知識を持つことが大事」と話す村田院長＝福井市の県立すこやかシルバー病院（出蔵浩隆撮影）

―認知症の現状は。

「認知症の人は国内に約５００万人いるとされる。最大の要因は加齢。高齢化が進む日本では今後も増え続け、県内では25年に約３万２千人になる見込みだ」

―症状の特徴は。

「認知症で最も多いのがアルツハイマー型で、全体の６割。２番目のレビー小体型は２割で、残り２割には血管性などさまざまなものがある。アルツハイマー型は、物を覚える力が低下する。朝言われたことを夕方には覚えていなかったり、よく知る道が分からなくなったりする。レビー小体型は、壁の模様が動いて見えるなど、幻覚の症状が特徴。一方、人の名前が出てこないなど、覚えていたことが思い出せない『物忘れ』と認知症は異なる」

―病院内で実施しているデイケアとは。

「認知症患者は自分で計画を立てる遂行機能や意欲低下により、無為な生活に陥りやすい。当院ではリハビリの場としてデイケアを実施し、体を動かすゲームや書き取りなどのメニューを日替わりで提供している。１日平均約15人が利用している」

―自宅でできる予防策はないか。

「計算や書き取りドリル、塗り絵、パズルなどは良いが、日常生活の中でできることを勧める。朝昼晩の食事を覚えておいて日記に書くことや、新聞の見出しを覚えるなど、暗記を意識することが重要だ」

―家族や介護職員らが意識すべきことは。

「徘徊や暴力、妄想などの行動心理症状は、家族らの不適切な対応が原因で現れることが多い。例えば、幻覚などを否定すれば、余計に被害的になりやすくなる。うまく受け流す対応を覚えることが大事だ。認知症の正しい知識を持つことが予防になり、患者が落ち着いて生活できる環境にもつながる」

「福井県は高齢者との同居率が高く、家族が症状に早く気付きやすい利点がある。反面、妄想の対象になりやすいため、トラウマ（心的外傷）を抱えることも多い。患者が入院や治療で良くなっても、家族が『帰ってこないで』と拒むケースはよくある。病気の進行を遅らせる薬もあり、軽度の時に治療すれば、また一緒に暮らせる。ぎりぎりまで我慢しないで、早めの受診を心掛けてほしい」

むらた・けんじ　精神科医。１９９８年医師免許取得、福井医科大（現福井大）精神医学教室入局。２００３年から県済生会病院神経精神科医長、15年から県立すこやかシルバー病院医長などを歴任し、20年４月から現職。52歳。